

島根県の礫浜海岸で確認した日本海側初記録のマメアカイソガニについて

桑原友春（島根県立宍道湖自然館ゴビウス）

島根県立宍道湖自然館は、島根県内でみられる身近な水生生物を展示する水族館である。水族館の最大の目的は生物を収集し、飼育、展示することであるが、そのほかにも希少生物の繁殖、生きものや環境についての情報を多くの人に広めるといった役割も持っている。こうした日々の業務のなかで、新しい知見を得る機会は多く、本研究もそのひとつである。

マメアカイソガニは、2009年に新種として発表されたばかりで、これまでに太平洋側の紀伊半島、大阪湾、徳島県沿岸でしか見つかっていない。2012年4月、日本海側に位置する島根県松江市島根町の礫浜海岸においてマメアカイソガニの生息を確認したので紹介する。

本種は、最大でも甲幅10mm程度までにしかならない小型のカニで、雄よりも雌のほうが大きくなることが知られている。生息環境は礫浜海岸の満潮線付近にある転石の下で、石をめくると細かい砂利のすき間に、素早く逃げ込む姿が観察された。同所的にみられるカニ類には、ヒメアカイソガニやアカイソガニなどがいる。本種はこれら2種よりも小型であり、よく似るアカイソガニとは、歩脚の後縁に長い毛が生えている点などで見分けることができる。また、本種は大きな石の間に細かな砂利が詰まっているような場所で多く観察されたが、逆に石の間にすき間が多くある環境では観察されなかったことも、先の2種と異なる点である。さらに、同じ島根町において2013年9月に採集した雌が抱卵していたことから、本種の日本海側での抱卵期は秋頃であると推察された。

本記録は島根県および日本海側での初記録であるが、今後の詳細な調査により、日本海側の他の産地が新たに発見される可能性も高いと考えられる。

